

モノ教材を用いた社会科学学習についての一考察 ～歴史的分野「古代までの日本」を事例として～

木村 佳 則

はじめに

社会科の授業では教科書や資料集などの教材のほかに、実物教材やレプリカなどのいわゆるモノ教材が使われることがある。普段見ることができない考古資料や歴史的な史料の複製・レプリカ、社会的事象やしぐみを考えるための身近な実物など、モノ教材は多種多様にある。学習場面においてモノ教材は、見たり触れたりすることで生徒の歴史的事象への関心・意欲を高める効果的な教材である。またモノ教材とそのほかの資料や教師による発問と組み合わせることで思考力や判断力が育成されると考える。

このようなモノ教材がもつ効果やモノ教材を用いた授業実践についての研究は数多くあり、丹念な研究の積み重ねがある。モノ教材について紹介、モノ教材を用いた実践例の報告などに関する先行研究としては、阿部泉氏^①や若木久造氏^②の著書が詳細な研究を述べている。

本研究では、そういった研究についての検討の視点ではなく、本学校園の研究を踏まえ、モノ教材を用いた実践が生徒の関心・意欲を高めることに有効かどうか、生徒の実感として知識・理解に有効かどうか、などを検討するものである。また本校オープンスクールの社会科の授業でのモノ教材を用いた授業の成果とあわせて、モノ教材を用いた授業における子どもの関心・意欲の高まりについて、考察するものである。

本校がある島根県松江市は、歴史的に見て出雲地域に含まれ、『古事記』や『出雲国風土記』にも描かれる地域である。神話をもとにした神楽「佐陀神能」は文化的に評価され、世界無形文化遺産にも認定されている。そういう歴史的背景のもと、『古事記』に描かれる神話や『出雲国風土記』の記述内容が遺跡・遺物などの考古資料に表れている。歴史的分野では「古代」の歴史的事象と関わりが深く、古墳や副葬品の考古資料が豊富である。また地理的な視点から見ても考古資料の中には東アジアとのつながりを示すものも多くある。

そのため、中学校学習指導要領の内容^③を踏まえ、「古代までの日本」で単元を構想し、生徒に「古代までの日本」の歴史的事象を少しでも身近に感じられるよう、単元を組み替えたり、モノ教材を用いたりしながら実践することとした。歴史的分野の「古代までの日本」での事例を通して、モノ教材を用いた授業が生徒の関心意欲の高まりに有効かどうかを検討する。

1 研究の構想

(1) 本学校園の研究との関わり

本学校園の研究は、平成26年度から研究主題を「学び続ける子どもの育成」、目指す子どもの姿を「一人一人が問いをもち追求する姿」として、本学校園全体の研究を進めることとした。

“学び続ける”ためには、子ども一人一人の「もっと深く知りたい」「もっと調べてみたい」「どうしてなんだろう」といった関心・意欲が土台となっていると考え、それらが追求意識や問いとなって表れる。つまり、関心・意欲が高まることで追求していく原動力が生まれ、自らの追求意識や問いが引き出され、それらをもとに学びが続いていくものと推測される。

そういった関心・意欲や問いを引き出す手立てとして、教材との出会いや単元構想の工夫、問いを創造する場面づくり、学び合いなどの協働的な営み、自分の取組のふりかえりなどがある。それらを単元の場面ごとに取り入れながら、単元と単元をつなげて、学び続ける過程を目指していくものと考え^④。

(2) 本研究の構想

① 生徒の実態

まず歴史的分野の古代の学習を進めていくにあたり、小学校の学習内容を確認するために「古墳」について、イメージマップを作成した。すると、ほとんどの生徒が小学校で「なぜ、古墳はつくられたのか？」という古墳の目的を理解しており、各地にリーダー的存在の人がいて、その権力者の墓が古墳であると認識していた。

しかし、出雲地域には墳丘墓の一形態である四隅突出型墳丘墓があるものの、「墳丘墓」についての知識を問うとほとんど知識はなかった。

提示した2人の生徒のイメージマップから考えると、本単元では、ねらいに即して、古墳が「ヤマト王権」「渡来人」「大王（権力者）」「古墳時代」などがつながっていくことが大切であると推察する。また古墳の前段階として墳丘墓

など埋葬形態があり、それに地域性があることを捉えさせたいと考えた。

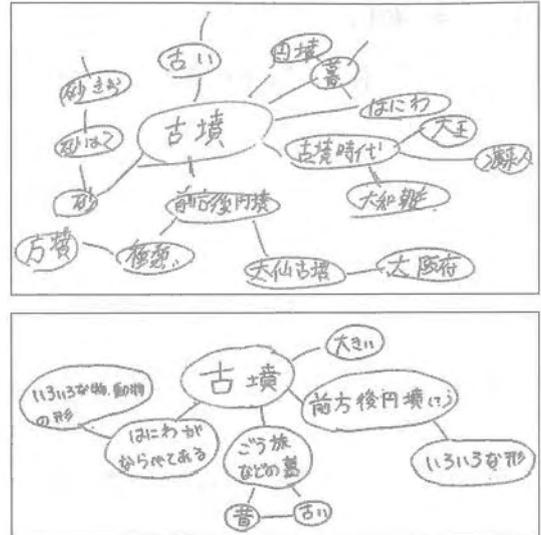


図1 生徒のイメージマップ

② 単元構成と指導の工夫

本単元では、単元構成を「国家形成」という視点で構成している。その理由は以下のようなことである。学習指導要領解説p73では、中項目のねらいとして、「…東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを、ヤマト王権による統一と東アジアとの関わりを通して理解させる」とある。したがって、支配者がいない集落、支配者が出現するムラ、支配者どうしが争うクニ、東アジアの国とのつながりを強化するクニという段階的に学習することは、世界の古代文明の中国文明の学習内容と似た部分もあり、より古代の特色を整理する意味でとらえやすいと考えた。

また、出雲地方には四隅突出型墳丘墓がある。分布つまり広がりには山陰地方や北陸地方などに地域的に限定されている。前方後円墳などの古墳は大和地方を中心に全国的に分布している。その分布の違いに含まれている謎を身近な地域を教材として取り上げることにより、生徒の意欲を向上させ、「問い」を創造することができる。さらに、出雲地方の古墳や鉄をめぐる歴史的事象を資料から読み取り、「他の地域と出雲地方とでは、ヤマト王権との関係が異なるのではないか」という探求できる謎が含まれている。古墳について、現在とは一見何の関係もないように考えてしまうが、埋葬する風習やその行為に含まれる思いや願いは現在との共通点もあり、最終的には自分のこととして古墳にまつわる歴史的事象を考えることができる。考えた。

③ 授業実践の工夫

まず墳丘墓や古墳にまつわるイメージマップを作成し、小学校の時の知識を把握する。次に、単元構成を小単元の「世界の古代文明」と関わらせながら設定し、生徒が古代の日本を学習しやすくするために、ムラからクニ、そしてクニをまとめ東アジアとつながるクニというような段階的な授業の組み立てを構成した。

さらに生徒の思考揺さぶり、「問い」を創造するために、出雲地方の墳丘墓と古墳の広がりやの違いを提示し、生徒からの疑問をもとに課題を出すような学習を展開する。そして、多くの豪族が農耕の効率を上げるための鉄を求めて、ヤマト王権とつながりを持ち、その結果、全国

各地に大和地方の豪族のシンボルである前方後円墳が広がったことに気付かせたい。

以上のように、生徒の実態を踏まえ授業を構想し、行うにあたっての工夫を考えた。この構想に加え、授業の随所にモノ教材を用いて授業を展開し、アンケートの実施・分析から、モノ教材が関心意欲を高めることに有効であったか、生徒の実感として知識理解につながったかどうかを検討していきたい。またモノ教材の有効性とは直接的に関係ないかもしれないが、本学校園の研究との関係から生徒の思考力・判断力・表現力の高まりについて、ワークシートの記述内容から分析してみたいと考える。

さらに、これとは別に本校のオープンスクールでの社会科の授業実践も含め、モノ教材の効果をその感想から検討していきたいと考える。

2-1 研究の実際（「古代までの日本」の授業実践）

本校の1年生4クラス（133名）を対象に、古代までの日本ということで授業実践を行った。ここに紹介する本時は、附属学校園の合同研修会として公開したものである。これまでの学習を踏まえて、古代の日本の国家の形成について、出雲地域を例に考えようとしたものである。

本時では、前時まで学習した鉄を求める豪族と、鉄を自分たちでつくる技術や大陸とのつながりなど、強大な力をもっていた出雲地方の豪族とを比較するために、出雲地方の歴史的事象を資料として提示し、生徒のもつ固定観念や法則性をゆさぶる。そして、生徒がそこから疑問を発表する場面を設定し、単元の目標とすり合わせながら集約して、問いを導く。その後、出雲地方の豪族とヤマト王権との関係を、ワークシートの図にあてはめて自分の考えを表す。ついで、扱う資料に通し番号を入れておき、根拠とした資料が分かるようにしながら、個々に読み取りを行った上で、班のメンバーに説明するグループ活動を行う。そのようにして、自分なりに根拠をもって探求する活動を通して、ヤマト王権の支配が全国に拡大したことを深めさせたい。

また四隅突出型墳丘墓や前方後円墳の模型、青銅器のレプリカなども準備し、子どもにインパクトを与えたい。そして、内容の節目において、古代と関わりがあり現代でも使われている、あるいは行われていることを資料で提示し、その目的や用途に触れながら、ふりかえりをする。それにより、歴史が自分のくらしと関わっていることに気付く姿を期待したい。



写真1 生徒が資料から考えている様子

(1) 単元名

古代の日本の国家がどのようにして形成されていったか

～世界の古代文明と日本の国家形成との関わり～

(2) 単元のねらい

古代の日本の国家が形成された過程を、世界の古代文明のおこり、日本列島における農耕の広まりと生活の変化、古墳と鉄器からみるヤマト王権による統一と東アジアとの関わりなどから理解させる。

(3) 展開計画 (全10時間 本時8/10)

次	主な学習	時	具体的な学習・内容	用いるモノ教材
1	・世界の古代文明(国家)はどのようにして形成されたのか。	1～3	・中国文明を例に、国家が形成される要因を考える。(農耕の発展、祭祀や儀礼の発達、都市や国家の形成、文字の発達、青銅器や鉄器の使用など)そして、それらが四大文明に共通する事柄であることに気付く。	
2	・古代の日本の国家はどのようにして形成されたのか。 ～中国文明とのかかわり～	4・5 6 7 ⑧ ⑨・10	<ul style="list-style-type: none"> ・ムラやクニができる前までは、おもに狩猟や採集の生活が小規模の集団で営まれていたことを考える。稲作が伝わり定住するようになったなどの生活の変化を経て、ムラが形成されたこと、指導者が力を持ち始めたこと、自然を崇拝し儀式や信仰を深めたことなどを考える。 ・土地や米をめぐる争いが起き、ムラがまとまってクニへと発展していき、邪馬台国の卑弥呼という王が支配していたこと、中国に使者を送り国内で優位に立とうとするなど大陸との交流もあったことを考える。 ・四隅突出型墳丘墓から出雲地方の豪族に独自の支配地域があったこと、前方後円墳などの分布の広がりからヤマト王権の支配が全国に拡大し、力をもった背景に鉄製の道具、大陸との関わりがあったことなどを考える。 ・四隅突出型墳丘墓や大量の青銅器などの発見、弥生時代からの鉄の文化など、他の国とは異なる歴史的な事象を提示し、古代の出雲地方とヤマト王権とがどのようにつながっていたのか、その関係性を探求する。 ・仏教を中心とした政治のしくみ、遣隋使などを送り中国の政治にならった国づくりを行ったことを考え、国外の情勢や文化に影響を受けながら、天皇中心の全国的な法整備を整えたことを考える。 	<ul style="list-style-type: none"> ・青銅器の複製(銅戈・銅鏡) (参考資料1) ・「漢倭奴国王」の金印のレプリカ ・四隅突出型墳丘墓の模型 ・前方後円墳の模型 (参考資料2・3) ・出雲型子持壺の複製 (参考資料4)

(4) 本時の学習

① ねらい

ヤマト王権の全国的な統一を、出雲地方の歴史的な事象を踏まえ、出雲地方の豪族とヤマト王権との関係性から自分なりに根拠をもって語ることができる。

② 展 開

学習場面と子どもの取組	教師の支援と願い・評価
<p>1. 前時の学習を全体で振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヤマト王権は、鉄を独占し、鉄を求めていた多くの豪族を従えていた。 ・出雲地方の豪族も四隅突出型墳丘墓という独自の埋葬施設をもつ強大な王がいた。 <p>2. 出雲地方の歴史的事象の資料を通して、本時の課題を作り出す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出雲の豪族は、鉄などを求めてヤマト王権に従う必要はないのではないか。 ・出雲に強大な王がいたにもかかわらず、墳丘墓はどのように広がらなかったのか。 ・前方後円墳が出雲にも広がっているのだから、出雲はやはりヤマト王権に支配されたのではないか。 	<p>教師の支援と願い・評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ヤマト王権に従った地方豪族が、鉄や大陸の文化を求めていたことを全体で共通理解する。 ・同じような王だったにも関わらず、前方後円墳は全国に、四隅突出型墳丘墓は出雲地方にのみ見られることを共通理解する。 ・出雲地方では、鉄を自分たちで作ることができる大陸とのつながりがあり文化や技術も取り入れられる、などの資料を提示し、前時までの学習をゆさぶる。(資料1・2) ・疑問をそのまま発言するように促し、単元の目標に沿うよう本時の課題を全体で作っていく。
<p>出雲地方の豪族(王)は、ヤマト王権とどのような関係だったのか。</p>	
<p>3. 出雲地方の豪族が、ヤマト王権とどのような関係であったか、根拠をもって考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対等な関係：ヤマト王権は協力して倭を治めるために、出雲の王に統治を任せた。 ・ヤマト王権の方が上：出雲地方の豪族は圧倒的な物量や文化の違いから、ヤマト王権に従った。 ・出雲の王の方が上：独自の文化をもち、鉄や大陸とのつながりもあり、ヤマト王権よりも上だった。 <p>4. まとめとして、考えた推論を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出雲の王は、墳丘墓など独自の文化があることからヤマト王権に認められて、その地域を治めていたと思う。つまりヤマト王権とは対等な関係であったと考える。 ・ヤマト王権とつながることは豪族にとって利益があったと考える。しかし、鉄を独占し武力的にも強いと考えるので、ヤマト王権は全国の豪族を従えていたと思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・話し合いができるように、ワークシートの図に自分の考えを書きながら、追求するように促す。 ・個々の考えが書けたところで、個々で資料を読み取る活動を行う。(資料3～5) ・読み取った資料について、班のメンバーに説明し話し合いながら、探求できるようにする。 ・生徒の様子を見ながら、資料についての補足や説明を行い、探求できるようにする。 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>評価の観点(社会的事象を通して課題を探求する)</p> <p>出雲地方の歴史的事象をとらえ、ヤマト王権との関係性を、自分なりに根拠をもって語ろうとする。</p> <p>【評価方法 発言・ワークシート】</p> <p>支援</p> <p>資料を読み取る活動を丁寧に行いながら、歴史的事象をひとつずつとらえるように促す。</p> </div>

③ 本時で目指す子どもの姿

- ◎前時の学習と身近な地域の歴史的事象を比べ、自分たちで問いを創造しようとする姿
- ◎身近な地域の歴史的事象を活用し、自分なりの根拠をもって探求しようとする姿



写真2 資料をもとに説明している様子

資料1 本時のワークシート

<社会科配布プリント6> ○古代の日本の国家はどのようにして形成されたのか ~中国文明との関わり~
 ③出雲地方の豪族とヤマト王権は、果してどのような関係だったのか、自分なりに考えてみよう。 ()組・氏名 ()

①ヤマト王権と出雲の王(豪族)との関係は、どれにあてはまるか。そして、今の自分の考えを文章にしてみよう。
 ②根拠となる資料を読み取ろう。班のメンバーに伝えることになるので、読み取れることや推測されることをメモするようにしよう。
 ③グループのメンバーの話聞いて、あらためて自分の考えを書いてみよう。

①

ヤマト王権の方が出雲の王よりも権力が強い
A

ヤマト王権と出雲の王は権力が対等に近い
B

出雲の王の方がヤマト王権よりも権力が強い
C

②

読み取った資料番号

資料から読み取れること、推測されること

③

最初の考え↓

根拠とした資料番号

考え直したもの↓

資料2 本時の授業資料1~5

古代出雲の製鉄遺跡

資料番号

1

補足：
 全国でも最も古い製鉄の跡が鳥嶺の県にある。鉄をつくるには「砂鉄」が欠かせません。砂鉄がたくさん取れた鳥嶺県の山間部をも支配していた出雲の豪族は、自分たちで鉄をつくる技術があったと考えてよいのではないだろうか。そして、出雲各地で鉄を生産していたと推測できるのではないだろうか。

●炉の下に木炭の粉を敷く、
単純な地下構造

全国でも最古級(6世紀)の今佐屋山遺跡の製鉄炉は、大きさが50cm×50cmの正方形とかなり小さい。遠気取りの構造も、炉の下を深く掘り込み、そこに木炭の粉を敷くといった簡単なものだった。1回の授業でできる鉄は、ナイフ1本程度の量だったと考えられている。

古代

全国最古級の製鉄遺跡・今佐屋山遺跡(福徳町市木)

資料番号

2

補足：
 3世紀ごろの肥前地域には、青銅(現在の隴山銅)や鉄(現在の雲山銅あたり)などの国内の産の産物にみられる土質が発見されている。また特に、新羅半島の土質や中韓のガラス製品なども発見されており、大船とのつながりをもっていったと考えられる。

資料番号

3

神原神社古墳の三角縁神獣鏡
この鏡には「神原三尊」という銘文があります。「皇弟」は中国の漢の年号で、「三尊」は高句麗国号の年号です。鏡に刻まれた年号(内題)と外題とを比べると、その間に、中国の神話や道徳が描かれ、背景色が濃くなっています。
この鏡は高句麗で本國製のもの、永遠の鏡りつづいた百済の元元(元元)に贈られたものと考えられています。



三角縁神獣鏡 (東京国立博物館蔵 品23.04)

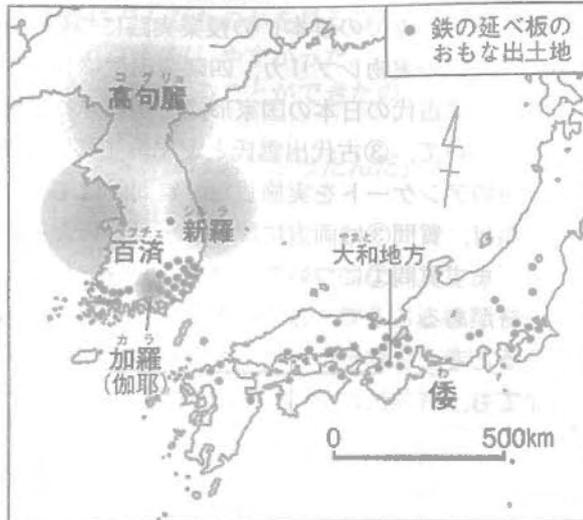


神原三尊神獣鏡

補足：
邪馬台国が近畿地方にあって、のちのヤマト王権だとして、卑弥呼が中国からいただいた銅鏡100枚のうちの1枚が出雲から見つかるということは・・・？

参考文：『いにしへの高麗ガイドブック2巻 邪馬台国時代の高麗』鳥取県教育委員会、1996年

鉄の延べ板が出土した場所



● 鉄の延べ板のおもな出土地

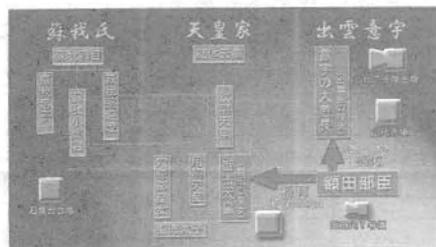
資料番号

4

補足：
鉄の延べ板は、鉄を溶かしたものである。それを再度、溶かして加工すれば、鉄製品をつくることができる。その多くが、朝鮮半島から発見されていることから、朝鮮から日本(倭)にもたらされたのではないかとされている。日本では、特に大和地方で多く発見されている。

「額田部臣」銘文入り大刀 (重要文化財)

6世紀後半に造られた岡田山1号墳出土の大刀には、刀身が彫り込んでそこに彫を埋め込むことによって「額田部臣」の文字が刻まれていました。鋳や刀が省略されていますが「額田部臣」と読むことができます。この額田部臣は、額田部と呼ばれた人々(部民)の部領をとりまとめ、臣という称号が与えられた額田部のリーダーを意味しています。古墳の土層やマドの大刀に奉仕する代領としてリーダーの地位を認められ、大刀にも自らの名と地位を示す額田部臣を刻んだのでしようか。
部民とそのリーダーの存在を示す最古の資料です。



古墳の大刀長と天皇家・蘇我氏との関係

資料番号

5

補足：
ヤマト王権の豪族の名が記された鉄剣。このような名前が刻まれている鉄剣は、全国でも18例くらいしか、まだ見つからない。それが出雲から見つかったということは・・・？

額
田
部
臣



「額田部臣」銘文入り大刀 (重要文化財)

3 研究の成果

(1) 「古代までの日本」の授業実践の成果

「古代までの日本」の授業実践について、学習後、1年生133名を対象に、①青銅器や出雲型子持壺の実物レプリカ、四隅突出型墳丘墓や前方後円墳の模型などを使って授業したことについて、②古代の日本の国家形成を学習するにあたって、中国文明の成り立ちを中心に学習したことについて、③古代出雲氏とヤマト王権との関係を考える授業について（自由記述）、という3項目のアンケートを実施した。質問①はモノ教材に関する項目、質問②は単元構成の工夫に関する項目、質問③は両方に関わる項目といえる。

まず質問①について、119名の生徒が「わかりやすい」と回答した（図2）。生徒自身、モノ教材があることで、社会的事象をイメージしやすかったり、理解が深まったりする印象を受けていると考えられる。また「わかりにくい」と回答した生徒はとても少なく、どのような生徒に対しても、有効にはたらいた可能性が高い。

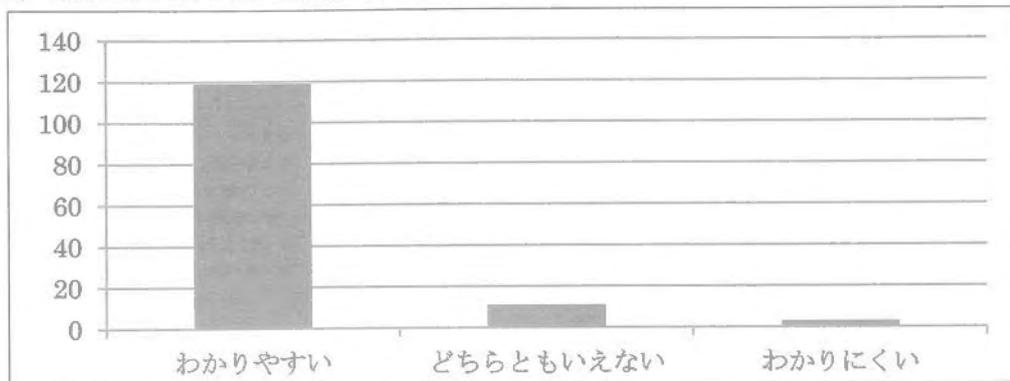


図2 実物を使って授業することについて

次に質問②について、87名の生徒が「わかりやすい」と回答した（図3）。単元構成を工夫したことで、古代の日本の国家形成について、わかりやすいと感じた生徒が多かったことがわかる。しかし、41名の生徒が「どちらともいえない」という回答をしていることから、生徒の関心意欲や実態に即しながら、より学習内容が理解できるような単元構成を考えながら、授業を展開していくことが求められていると考える。

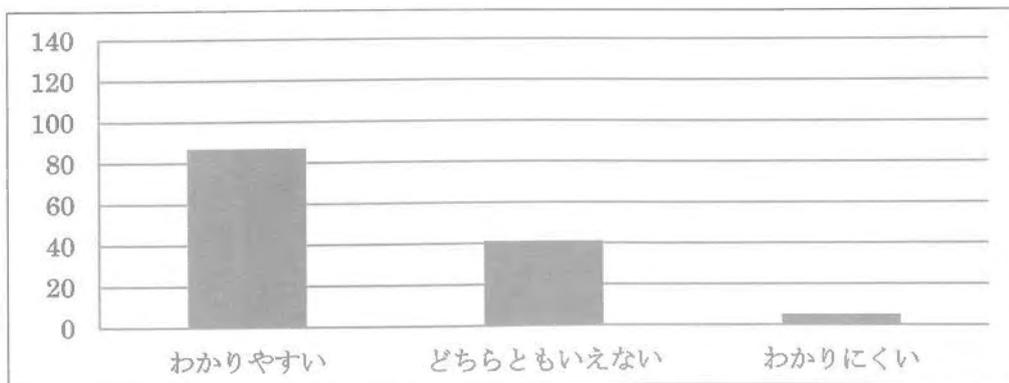


図3 世界の古代文明を含めた単元構成の工夫について

続いて質問③について、自由記述の中からモノ教材に関する記述を抜粋した。

- ・実物レプリカは意外に大きく、新しい発見がたくさんありました。
- ・いろいろなレプリカや模型があったので、教科書や資料集の内容のイメージがわきやすかった。
- ・青銅器や金印のレプリカなどを見て、授業の内容がわかりやすかった。実物を見て、より興味をもった。

- ・実物レプリカや模型を使うことで、その物の形などがイメージしやすく、内容も記憶に残った。
- ・模型などを見て、わかりやすかったし、それをもとに想像力を広げることができた。
- ・レプリカや模型を使った授業がわかりやすかった。実際にどんなものかを見ることで、教科書に書いてある文や写真を見るよりも、ずっと印象に残ったので理解しやすかった。
- ・青銅器や出雲型子持壺などの実物レプリカや模型は、実際に触れることができたのでわかりやすかった。
- ・実物レプリカなどに見たり、触れたりすることによって、「こんな感じだったんだ」と自分なりに明確になり、わかりやすかった。

これらはあくまでも生徒の感想であり、明確な根拠やデータがあるわけではない。しかし、生徒の実感として、モノ教材が学習において効果的に働いていることが推察される。波線部をみると、わかりやすい、記憶に残ったなどの学習内容の理解度に関わるものや、想像力を広げるきっかけや興味関心につながっているものがあることがわかる。モノ教材が学習内容として生徒の印象に残り、関心意欲面や知識理解面に関係しているのではないだろうか。

最後に本学校園の研究としての視点から、授業実践を振り返ってみる。

前述した単元構成の工夫に関するアンケートの結果から、多くの生徒がわかりやすいと回答しているため、この工夫により、「古代までの日本」の学習内容が理解しやすかったものと考えられる。

続いて、ワークシートの記述内容から、思考を揺さぶる資料の提示がどうであったか、資料をもとに追求、探求できたどうかなどを見ていきたい。

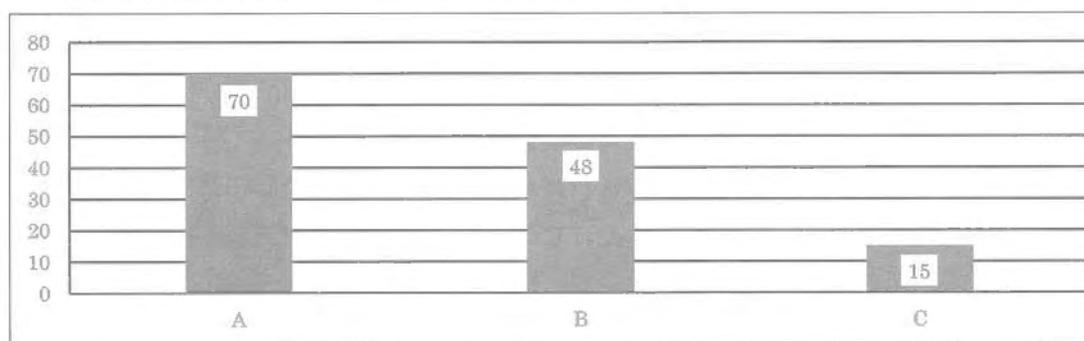


図4 ワークシートの最初の予想（ヤマト王権と出雲の王との関係）

本時の導入場面において、前時に学習した出雲地方の特徴的な歴史的な事象を振り返って、さらなる歴史的な事象を提示した。四隅突出型墳丘墓の広がりや製鉄の技術の資料、中国大陸・朝鮮半島とのつながりを示す資料、出雲型子持壺などの資料を提示し、これまでの生徒の思考を揺さぶるはたらきかけを行なった。その後、自分が考えるヤマト王権と出雲の王との関係をワークシートに記入した。Aはヤマト王権のほうが強い、Bはヤマト王権と出雲の王は対等に近い関係、Cは出雲の王のほうが強い、という選択肢である。小学校段階の既習内容であればAの割合がとて高くなると考えられる。しかし、生徒の思考を揺さぶるはたらきかけにより、BやCの意見の割合も高くなっていることは見過ごせない（図4）。資料提示により、A・B・Cの幅広い思考が促され、班活動や学び合いを行なう際にも有効に働くと考えられる。

自分の考えを記入した後、個人でそれぞれ違う資料の読み取りを行い（追求）、班のメンバーに資料の解説や自分の考えを説明する活動を行なった（探求）。その活動の結果、新しい情報を得たり、異なる考えを聞いたりしたことで、自分の考えを深めることができたようである。以下に生徒のワークシートを示す。生徒Aは、最初の考えは「ヤマト王権のほうが強い=A」という考えであったが、資料を読み取ったり、他者の意見を聞いたりしたことで、自分なりの根拠を持ちながら「対等な関係に近い=B」という考えに変化していることがわかる。生徒Bは、最初の

考えBから変化していないものの、ヤマト王権と出雲の王との関係性を自分なりに推論している様子がわかる。生徒Bは最終的に、班のメンバーが読み取った資料の解説を聞き、それを一つの根拠にしながら、自分なりの推論を組み立て、ヤマト王権と出雲の王の関係について述べている。そのほかにも、資料を読み取ったり、それに対する意見を聞いたりして、自分の考えを深めることができたものや、より自信をもった推論となったものも多く見られた。

最初の考え↓

ヤマト王権の方が支配していた地域が広く、出雲よりも早く栄えたと思う。ヤマト王権には、強い豪族がたくさんいたと思うから、ヤマト王権の方が権力が強いと思った。

根拠とした資料番号

5

考え直したもの↓

出雲の国が大和王権から鉄剣をもらっているということは、出雲の国の力が認められたということだと思う。だからヤマトと出雲は対等に近かったと思う。

図5 生徒Aのワークシート

最初の考え↓

もしAとしたら、大和王権が出雲を支配下に置き、鉄を奪ったはずなのに、大和王権はしなかつた。そして、Cとしたら、出雲が全国を支配しているはずなのに、出雲はしていない。もしBとしたら、ヤマト王権は同じ物をもっている出雲の王に手を出すとはいけません。出雲を全国を統一していたヤマト王権に手はださないとつづきがある。

根拠とした資料番号

3

考え直したもの↓

Bかと思う。で、E、ヤマト王権が出雲に銅鏡を送ったということは、ライバルのような関係ではなく、互に友好関係を築きたいという思いを送ったと思います。だから、争いや、奪ったりする事がなかったのだと思います。

図6 生徒Bのワークシート

以上が本学校園の研究の視点で見たときの授業実践の成果である。その後、夏休みの課題として、地図作品をつくる課題を生徒に出した。すると、二人の生徒が墳丘墓や古墳に関する地図をまとめていた。学習した結果、調べてみたい、もっと詳しく知りたいという思いをもって地図作品をつくったことが見て取れる。古代出雲とヤマト王権との関係の一要素を学習したことで、もっと調べたい、考えてみたいという学び続ける姿につながったと考える。



作品製作の目的・工夫した点
学校の勉強で古墳について、くわしく学び、出雲にもあることを知ったから、調べて地図にまとめました。



作品製作の目的・工夫した点
出雲市は古墳が多いということで有名なので、古墳がどれだけ多いのか、分かりやすくしました。さらに何時代の古墳かパッと見てわかるように、時代別に色を塗りました。…(省略)

このように、本学校園の研究の視点で見たとき、単元構成の工夫は生徒の知識理解に効果的に働き、単元全体の学習効果を高めるものとなったと考える。また生徒の思考を揺さぶるはたらきかけについては、多様な思考につながり、学び合いの効果を高めたのではないだろうか。さらに、追求・探求を促す資料提示は、生徒の考えを補強する根拠となったり、考えを深めたり変化させたりする有効な手段となったと考える。そして結果として、自らの関心意欲の高まりによって、授業外での学び続ける姿につながったのではないかと推察する。

(2) オープンスクールでの授業実践の成果

オープンスクールについてのアンケートから授業実践の成果を考察していきたい。授業を受けた児童20名と授業を見られた保護者の方10名の合計30名のアンケートを分析した。おおむね肯定的な意見が多く、実際に触れられたことの感想や実物を用いた学習についての感想が見られた。以下に感想の抜粋を紹介する。

～児童の感想～

- ・ 普段触ることのできない昔の剣や道具を触ることができてよかった。
- ・ 古代の皿などを見たり触れたりすることができた。銅でできたものの他にも似たようなものがあるそうなので、興味がわきました。
- ・ 見たり触れたりして考えるところが楽しかった。もっと大昔のことを知りたいと思いました。
- ・ 資料を見たり触ったりするのが多くて、小学校よりも詳しく学ぶことができた。
- ・ なかなか触れたりできないものに触ることができてよかった。授業もとてもわかりやすくて良かったです。
- ・ 実際に触れて重さや厚みを感じて、どのように使うかを想像できたのでよかった。

～保護者の感想～

- ・ 資料をもとにグループで話し合いながら考えを深めていて、よかったと思います。
- ・ 実際に目で見て手で触れて考える授業はとてもよいと感じました。
- ・ 実物の資料を実際に見て触れて体験することによって、より授業の内容や意味を理解できると感じました。

児童の感想には、実物を用いて学習することを肯定的に捉えた表現が多く見られた。見たり触れたりすることで学習が深まるような実感が伴っている。また実物を用いたことで思考が刺激され、違う事象への追求やより深く知りたいなどの関心意欲が高まっていることがわかる。保護者の方の感想を見ると、実物などの資料を用いた学習が思考したり、それを深めたりすることに効果的であると捉えている。客観的な立場からも実物を用いた学習が思考を促したり、推測したりする力に有効であると考えているのではないだろうか。

(3) まとめ

2つの実践を通して、モノ教材は生徒の関心意欲面を刺激するのはもちろん、知識・理解面などにも効果的にはたらいている可能性がある。

教科書や資料集に登場するものを、実物レプリカや模型を通して具体的にイメージしたり、特徴を捉えたりすることで、学習内容と関連付けて、内容を理解していくものと推察される。また様々な発達段階であっても、モノ教材を通して、具体的な社会的事象をイメージしたり、当時の様子について想像したりすることができると考えられ、社会科においては学年、分野を問わず、有効な教材になり得る事は言うまでもない。

以上のことから、モノ教材は学習者の関心意欲を高めることにたいへん有効であり、学習者に対して、そのほかの効果的な要素が多々見られる可能性があることが推測される。

しかし、本研究の課題として述べておかなければならないことがある。それは、より詳細な分

析方法の検討である。本研究の分析の大部分は、生徒の主観的な感想や簡単なアンケートである。生徒の実感を蔑ろにはしないと考えるが、客観的な視点でなおかつ統計的な分析による有意差などを確かめられるような検証の方法を取り入れていかなければならないと考える。さらに研究の視点を踏まえた事前・事後のアンケートなどをもとにした生徒の変容なども研究として捉えていけるとより一層充実したものになると感じている。

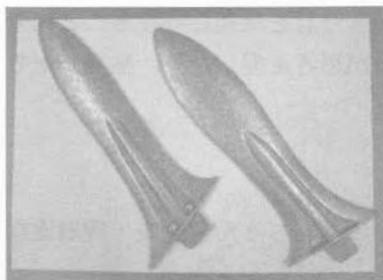
さらに、モノ教材の活用方法の検討もしていかなければならない。単に見せたり、触れさせたりするだけでなく、効果的な問いかけやグループ活動を組み合わせながら、モノ教材を活かしていく方法を見出していく必要がある。その点で、本研究は実際に見たり、触れたりすることに主眼が置かれ、モノ教材を効果的に活用する視点が足りなかったように感じる。モノ教材の魅力を引き出せるような効果的な活用方法を今後検討していきたい。

おわりに

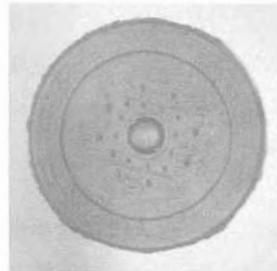
現代日本の特色の一つに情報化という一面がある。あらゆるものがデータ化され、インターネットを使えば、世界中から様々な情報が得られる。画像や動画によって、社会的事象に関する情報を見たり聞いたりすることができる。それらは使い方によっては良い面もあるが、現代の子どもたちの生活体験を少なくしているのではないだろうか。「パソコンで調べればわかる」「情報は身近なところではなく、どこか別の場所にある」といったように、実際に体験したり、モノに触れて何か情報を得たりする機会が減っているように感じる。だからこそ、モノ教材を活用して実物に触れ、そこから自分なりの感触を確かめて、情報を得る経験が必要ではないだろうか。

社会が激しく変化するとともに、学校での学習内容や学ぶべき社会的事象が変わっていくことも想定される。学校の中での教科の時間数増にあわせて、学習内容も増加していく。より厳選した教材の選択、精選した学習内容が求められていくと考えられる。その中で、モノ教材を用いることは効果的な方法ではないかもしれない。しかし、実物などのモノ教材がもつ不変的な魅力や価値を少しでも現代の子どもたちに感じてもらえるように、実物を見たり、触れたりする活動を学習の中に積極的に取り入れていきたいと考える。そういった経験が将来、日本の歴史や文化を語り継いでいく子どもたちに必要なことではないだろうか。だからこそ、モノ教材は社会科学習には欠かせない一つの教材であると考え、社会科学習におけるモノ教材の役割や意味をこれからも考えていきたい。

～ 参 考 資 料 ～



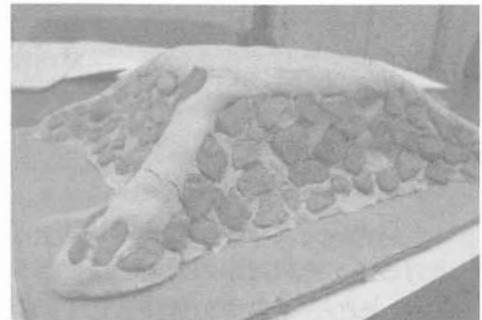
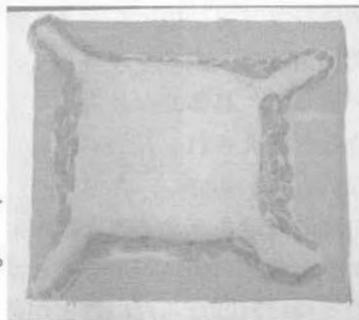
◀ 1 銅戈の実物レプリカ
(荒神谷博物館
: 平野氏 提供)

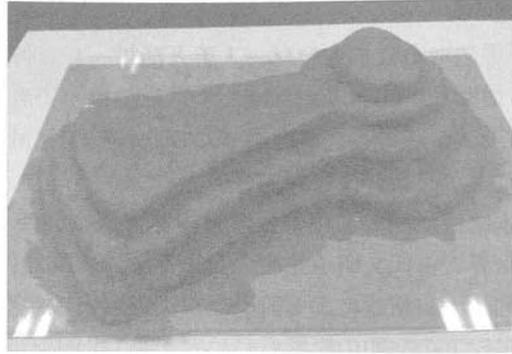
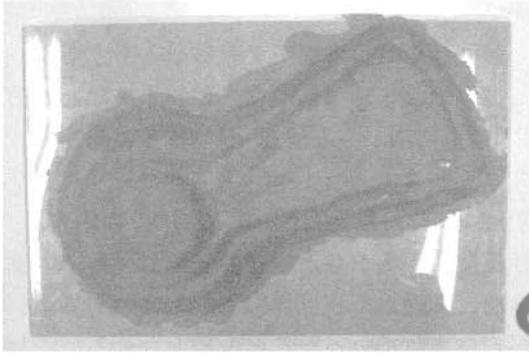


◀ 1 銅鏡の実物レプリカ
(荒神谷博物館
: 平野氏 提供)

2 四隅突出型墳丘墓の模型▶
(本校社会科部にて作成)

写真左: 真上から
写真右: 横から





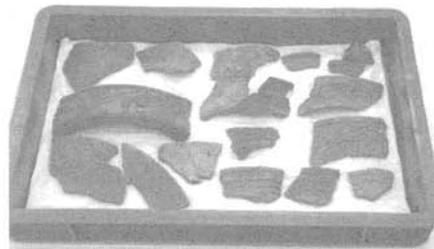
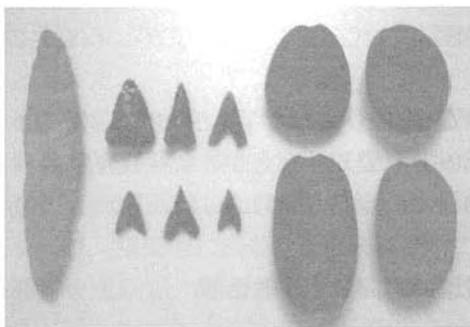
3 前方後円墳の模型（本校社会科部にて作成） 真左：真上から 写真右：斜め上から



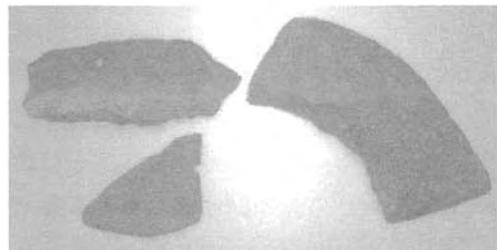
4 雲型子持壺の複製
（八雲立つ風土記の丘 提供）



5 古代人の衣装
（八雲立つ風土記の丘 提供）



6 縄文時代の生活の遺物^{※5)}（埋蔵文化財調査センター 提供）



7 弥生時代の生活の遺物^{※5)}（埋蔵文化財調査センター 提供）

注 記

- 1) 『手に取る日本史教材—入手と活用—』(地歴社, 1988年), 『日本史モノ教材—入手と活用—』(地歴社, 1993年), 『続 手に取る日本史教材—入手と活用—』(地歴社, 1998年) などがある。
- 2) 『モノからの社会科授業づくり—教材開発最前線・教室に楽しさと夢を—』(日本書籍, 1992年) などがある。
- 3) 本研究に関わる中学校学習指導要領(2008年)社会編の「(2) 古代までの日本」の内容は、「ア世界の古代文明や宗教のおこり, 日本列島における農耕の広まりと生活の変化や当時の人々の信仰, 大和朝廷による統一と東アジアとのかかわりなどを通して, 世界の各地で文明が築かれ, 東アジアの文明の影響を受けながら我が国で国家が形成されていったことを理解させる。」である。
- 4) 附属学校園の研究主題については、『平成26年度 附属学校園公開研究会 指導案集』(2013年)に詳細がある。詳しくはそちらを参照していただきたい。
- 5) あい縄文時代・弥生時代の遺物の写真は, 埋蔵文化財調査センターHPの『ふるさと島根の遺物』貸出事業の【ふるさと島根の遺物貸出セット一覧表】にある掲載写真より引用。

参 考 文 献

- ・安部康史・吉川幸男(2008), 「『モノ』への探求を基にした中学校歴史授業開発」『教育実践総合センター研究紀要第25号』p313 - 327 (2008. 3), 山口大学教育学部附属教育実践総合センター
- ・有吉研治(1998), 「『モノ』教材」に関する社会科授業理論の比較研究—実践者における『モノ』教材理論の形成過程を視点にして—, 兵庫教育大学大学院
- ・出雲弥生の森博物館(2010)『出雲弥生の森博物館 展示ガイド』
- ・黒田日出男・小和田哲男・阿部恒久・成田龍一・原田智仁・真栄平房昭・仁藤敦史・土屋武志・梅津正美・田村泰治・里井洋一(2011)『社会科 中学生の歴史 日本の歩みと世界の動き』, 帝国書院
- ・島根県古代文化センター編(1996)『いにしへの島根ガイドブック(第1~8巻)』, 島根県教育委員会
- ・島根県立古代出雲歴史博物館(2013)『島根県立古代出雲歴史博物館 展示ガイド』
- ・島根県立八雲立つ風土記の丘(2007)『常設展示図録 古代出雲の中心地意宇 八雲立つ風土記の丘の歴史と文化』
- ・田上哲也(2013), 「高校日本史授業におけるモノ教材を取り入れた学習活動」『探究 The research for social studies education 24号』p10 - 15 (2013), 愛知教育大学社会科教育学会
- ・「埋蔵文化財調査センター」(<<http://www.pref.shimane.lg.jp/maizobunkazai/>> (2014/8/18アクセス))
- ・文部科学省(2008), 『中学校学習指導要領解説 社会編』, 日本文教出版

(きむら よしのり 社会科 y.kimura@edu.shimane-u.ac.jp)